

国指定重要無形民俗文化財 岩崎鬼剣舞（いわさきおにけんばい）について

お茶の水女子大学人間文化研究科人文学専攻
（舞踊・表現行動学コース）1年

池田宏子

盆の精霊供養のために踊る風流念仏踊りのひとつで、威嚇的な仮面をつけて踊るところから「鬼剣舞」と呼ばれている。鬼面は、仏教の如来化身である五大明王を象徴している。そのため角がないとされる。剣舞（けんばい）という名称は、元は「反閉（へんばい）」からきているのではないかという説がある。由来は大宝年間（701-704）に修験の祖である役の行者小角が念仏を唱えながら踊ったのが始まりとも、大同年間（806-810）羽黒山の修験山伏が衆生済度の念仏踊りとして伝えたのが始まりともいう。

現行の鬼剣舞は、江戸初期～中期に今のような芸態ができあがっていったと考えられ、秘伝書や巻物から、北上市一帯で踊られている剣舞の中では、岩崎鬼剣舞が最も古い剣舞と確認されている。平成5年国指定重要無形民俗文化財指定。

（北上市立鬼の館パンフレットより抜粋）

〈出演〉

踊り手 和田 勇市（庭元）
太鼓 小原 秀明（連中）
笛 八重樫俊一（師匠）
手平鉦 小田島初雄（師匠）

・計測実験を行った演目

■一番庭（いちばんにわ）

「礼舞」とも称し、全体的に緩やかな踊りで、15種類以上ある全種目の、基本の踊りとされる。前半は念仏が唱えられる中「引き念仏」という一定の動作を繰り返し、後半は太鼓の音で闊達に踊る。本来は8人1組で踊られるもの。



写真2：鬼剣舞の実演

■一番庭の狂い

「扇合わせ」とも言い、扇を2人で高くあげ、合わせる優雅な踊り。「狂い」とは念仏や振込みなどが略され、踊り手の人数も8人の制約から解かれて、より伸々と踊られる踊りで、他には三番庭、刀剣舞などに狂いがある。

・実演を行った演目

■一人加護（ひとりかご）

加護とは仏恩を受けることで、別名「一人偉者（いかもの）」と称されるように、仏恩を受けた勇者の喜びの踊りという。地を踏んで四方を鎮め固める反問の型が顕著に振りに表れている。